

「目が開け、心燃えて」
ルカによる福音書 24 章 13 - 35 節

イエスさまが復活された日の夕方、二人の弟子がエルサレムからエマオという村へ向かって歩いていました。二人は歩きながら、この数日の間に起こった出来事を話し合っていました。すると、そこへ復活されたイエスさまが近づいてきて、一緒に歩き始められました。けれども二人の弟子は、それがイエスさまだとは気がつきません。

イエスさまは、彼らに「何の話ですか」と尋ねます。その問いかけに、二人は暗い顔をして「ナザレのイエスのことです」と答えました。そしてこの三日間で起こった出来事を話しました。

このとき、二人は「暗い顔」をしていたとあります。彼らは、「あの方こそイスラエルを解放してください」と望みをかけていました。しかし、その望みはもろくも崩れ去ってしまったのです。そして彼らは、絶望にどっぷりと浸かってしまっていました。それゆえ、この時の弟子たちはイエスさまのことは見ることができず、一緒に歩んでくださっていることも完全に見失ってしまうのです。

そのような弟子たちに対して、イエスさまはどうなされるのでしょうか。一緒に歩んでも分からないような者には語りかける価値もないと離れて行ってしまったのでしょうか。そんなことはありませんでした。この二人と共に歩まれるのです。しかもそれは、イエスさまの方から近づいて歩んでくださるのです。15 節には「イエスご自身が近づいて来て、一緒に歩き始められた」とあります。つまり、弟子たちが願うよりも前にイエスさまは、深い失望の中に立ちすくんでいるこの二人の心に寄り添ってくださっているのです。そして、この失望から立ち上がらせてくださるのです。

そもそも、この二人の失望の理由はどこにあったのでしょうか。それは本当の意味における救い主が分かっていたいなかったからです。もちろん、彼らは、イエスさまこそ救い主であると信じていました。しかし、「何から救ってくださる方なのか」ということが分かっていたいなかった。彼らにとっては、自分が今直面している問題を解決してくれる方こそが救い主だと考えていたのです。

けれども神さまから遣わされる救い主は、目の前の問題を解決してくれるなんて程度のことではなく、私たちの本当の問題である罪を解決してくださるのです。ご自身の命をもって、私たちが神さまと共に生きるために障害となるものをすべて取り除いてくださったのです。これこそが、罪を赦されるということです。そして、神さまがイエスさまの命をもって贖ってくださるほどに、私たちは価値ある存在である、そのことが分かるということなのです。

そのためにイエスさまは語りかけられるのです。暗い顔をしていた弟子たちに、神の国のこと、ご自身のことを、もう一度お話してくださったのです。そして、かたくなになっていた「自分の思い」というものが打ち壊されたとき、二人の弟子は、目の前にいる方がイエスさまだと気がついたのです。彼らは、最初はわからなかった。しかし、それでもイエスさま

は見捨てることなく彼らと歩みを共にし、変わらずに語り続けてくださいました。だから、彼らは心燃える経験をしたのです。

もうどこにも希望はない。彼らはそう思っていました。しかし、知らされたのです。この自分を神さまは、捨てておかれなかった。それどころか失望の道をとぼとぼ歩んでいたこの私とイエスさまは共に歩んでくださった。そしてそのことを知らされたんです。その深い喜びによって心が燃えたのです。それがイースターの恵みです。

その恵みが今私たちにも与えられているのです。私たちが気が付くよりも先にイエスさまが私たちと共に歩んでくださり、イエスさまが私たちに深く関わってくださって、私たちが失望から立ち上がらせてくださる。私たちをどんな時にも見捨てず、見放さず、歩みをさせようと願ってくださっている。そのような神さまの恵みの中に置かれている自分であることを、受け止めさせられていくのです。

イエスさまは、今も私達に語りかけてくださっています。神さまの大きな愛を私たちの心に届けてくださっています。それゆえ、私たちは喜びと希望に満たされて、心燃やされ、神さまと共に歩む道を歩んでいるのです。この復活の主を信じ生きていく者でありたいと願います。